ナキウサギの岩穴は、なぜ土で埋められたの？

―山奥で密かに進む巨大プロジェクト『大規模林道』事業―

市川利美

いちかわ・としみ
1995年7月ナキウサギふぁんくらぶを結成。その代表。現在はナキウサギの天然記念物指定をめざす署名活動やナキウサギ生息地の調査・保護活動を行なっている。

本文の要旨

大規模林道平取えりも線のルート近くに見つけたナキウサギ生息地で、いくつもの岩穴が土で埋められるという事件が起こった。しかも、建設主体の緑資源機構が、真相解明を求めるナキウサギふぁんくらぶに謝罪を求めてきた。道内の自然保護団体が結束して、大規模林道の中止と不当な謝罪要求の撤回を求める大きな流れができつつある。

一　確かにここにナキウサギが

―二〇〇三年六月八日―

こんなところにナキウサギはいるかしら？というような場所でした、そのトドマツ林の中は。岩が積み重なってごろごろした普通のガレ場とは違い、大きな岩の重なりが少なかったからです。それでも八年間の活動のなかでいろいろな生息地を見てきた私たちは、一つ一つ丹念に岩穴を覗き込んでいきました。そして、その五、〇〇〇㎡ほどの林の中に二ヶ所の貯食を見つけたのです。一つにはシダの葉、もう一つにはツルアジサイの葉です。まだ六月ですから、これが冬支度のための貯食かどうかは断定できませんが、ここにナキウサギが生息していることは紛れもない事実です。大規模林道平取えりも線のルートに近い場所でした。

二　大規模林道の素顔

ここで大規模林道について、少しご説明しておきます。大規模林道と聞いて、「えっ、何それ？」という方も多いでしょうから。

スタートは一九七三年、大規模林業圏開発計画としてスタートしました。計画は、全国に三二路線、距離にして二、二〇〇キロ、総事業費九、五五〇億円の巨大プロジェクトですが、三〇年間で完成したのは五〇％。これから工事はより山中の急峻な地形での難工事（トンネルも含む）を予定しています。

「林道」という言葉にだまされがちですが、幅が七メートルの二車線の完全舗装道路。大型観光バスが楽に通れます。幅が三、四メートル、使わないと自然に戻り、たいていは行き止まりで終わる「普通の林道」とは似て非なるものです。目的は林業を中心とする総合的な地域開発の推進でしたが、その後の林業の衰退の中で計画自体が破綻し、全国的にも反対の世論が高まっています。

道内には三路線の計画があり、二三〇㎞、事業費は一、二五〇億円です。このうち北海道の負担金一五〇億円といわれ、関係市町村にとっては建設費の負担のほかに完成・移管後の維持管理費も大きな問題です。たとえば、陸別町では年間六、七〇〇万円負担しており、全線完成すると一町あたり一億七、〇〇〇万円とも試算されています。

森や川を壊し、のり面をコンクリート化し、猛禽類、ヒグマ、ナキウサギなどの野生動植物の生息地の破壊、分断をもたらす大規模林道の建設は、今すぐ中止しなければ取り返しのつかないことになります。

三　密かによみがえっていた計画

ところで「大規模林道って、まだやってたの？」という方もいらっしゃるでしょう。

そうなのです。北海道に計画されている三路線の一つ平取えりも線の様似・えりも区間は、ナキ

ウサギや国の天然記念物である猛禽類などに影響を与えるため、いったん建設が休止になっていました（平成一〇年度の環境アセスメント）。

しかし、ナキウサギの大きな生息地を避ける形でルートが変更され、平成一三年のアセスでは一転して建設ＯＫとなったのです。新しいルート沿いにはナキウサギはいないし、猛禽類への影響も軽微であると。しかし、新ルートは、並行して走る旧ルートとは、わずか一、五〇〇メートルほどしか離れていません。影響が軽微だなどとはとても信じられないことですが、工事はマスコミにもほとんど報じられることなく、再開されていました。

昨年六月にルート近くにナキウサギの生息を確認した私たちは、林野庁にアセス結果が不十分であり工事を中止することを要請しています。

北の滝雄・厚和線はほぼ完成してしまっていますが、通る車もほとんどなくただコンクリートの構造物が山の中に異質にあるというだけの存在。

置戸・阿寒線の置戸・陸別区間はナキウサギの生息地が広がっているところで、私たちの調査でもルートにぶつかる形でナキウサギの貯食が見つかっています。ここは現在まだ未着工でアセスもされていません。大規模林道事業の整備のあり方検討委員会にかかっている区間の一つなので、事業を始めないよう要請しています。

四　ある訪問

―九月二二日―

この日、私の職場に独立行政法人緑資源機構の北海道地方建設部の最高責任者Ｓ氏が突然、訪ねてきました。緑資源機構（以下機構という）というのは大規模林道の建設を進めている組織で環境アセスメントもここが行なっています。一九四六年に設立されたときは森林開発公団といい、その後何度も廃止を提案されながら延命してきています。その背景には、役人の天下り先になっているという事情があるという指摘もあります。

その責任者の訪問ということで、勤務中ではありましたがお話を伺いました。彼は、「ナキウサギを実際に見てからすっかりふぁんになった。」「ＮＧＯと行政の協働が大切である。ナキウサギふぁんくらぶ（以下ふぁんくらぶという）がそのようなスタンスでいることはとても喜ばしい。」などと前置きの上、「ふぁんくらぶが見つけた場所を具体的に教えてほしい。」と言いました。私たちとしては一〇月の再度の調査まで待ってほしいこと、機構は自力で調査すべきであることを伝えましたが、Ｓ氏の懇願に負けて最後には、ポイントを示した地形図のコピーを渡しました。

五　岩穴に土が！

―一〇月一二日―

十月の連休に、私たちは予定通りその林内で調査しました。十勝自然保護協会のメンバーが一緒でした。

林に入ると、なにかがおかしいのです。岩穴がいくつも土で埋まっていました。六月に貯食を見つけたあたりです。その埋められた黒土がふわふわと新しく、その上には当然あるべき松の葉などの落ち葉がなかったのです。これはとても不自然なことでした。

そして、ある岩の前に頼りなげに生えているフッキソウの根元の土を指で軽く払ったときのことで

持ち込まれた黒土に差し込まれたように見えるフッキ草

岩を少し持ち上げると下にも黒土がぎっしりと

す。土の中から茎と緑の葉が出てきたではありませんか。その瞬間、これは人為だ、と思いました。誰かがフッキソウごと土を岩穴に埋め込んだとしか考えられません。

私たちはただぼう然とその場に立ち尽くしました。秋、冬の食料である草を貯め込む大切なこの時期に岩穴を埋められてしまって、ナキウサギは冬を越せるのでしょうか……。

六　だれがいったいなぜ？

それにしても、だれがこんなむごいことを？そして、なぜ？

普段はゲートがしまっている山奥で、一般の人はほとんど立ち入りません。道有林ですが、道の関係者がその林で森林施業をしたのは七月の初め。埋められた土は新しく、第一、森林施業をする人にはなんら動機がありません。大雨や台風や地震などの自然現象やシカによって土砂がこのように整然と岩の隙間に埋められるものでもありません。

動機が一番強いのは、緑資源機構です。穴埋めが発覚した二日後、期中評価委員会の意見聴取会が静内町であり、その翌日は委員がルートを現地視察しました。そんなときにナキウサギが生息しているというのは、事業の続行にとって大きな障害です。アセス結果の信憑性にも関わります。

また、その林の一部だけ狙ったように穴を埋めるというのは、そこがナキウサギの生息地と知ってやったとしか考えられないことですが、その林にナキウサギの貯食があったことを知っていたのは、私たち数人以外は、機構だけでした。

私たちは機構が関与した疑いが極めて高いと考えて、穴埋め発覚の数日後、林野庁と機構に対して口頭や文書で抗議すると同時に、真相を解明するよう求めました。もし本当に彼らが関与したなら、これは国民を欺く一大事です。そうでないとしても重大な生息地破壊があったのですから林野庁と機構には真相を解明する義務があると考えました。

七　奇妙な反応

問題はさらにここからです。

一　人為的穴埋めを報じた一〇月一六日付読売新聞によると、機構は「一〇月一〇日に専門家を交えて調査したが、ナキウサギが生息する痕跡はなかったと主張し、『もともとナキウサギのいないところで荒らす行為をするはずがない』」と言ったそうです。彼らは穴埋め発覚の二日前に現地に行っていたのです。

それにしても、「もともといない」という言い方は、六月に貯食があったという私たちの調査結果を否定するものです。では、S氏はなぜわざわざ情報をとりに来たのでしょうか。初めから否定することだけが目的だったのでしょうか。

二　林野庁は、逃げの姿勢で一ヶ月以上たって現地調査の日程を入れましたが、時すでに遅し。悪天候のため現地に入れなかったのですが、そもそも新鮮な現場の調査でなければ意味がありません。

三　機構に至っては、「場所がわからないから調査できない」と言います。「そこにナキウサギはいない」と言えても、「そこ」がどこだかわからないとは……。おまけに、ふぁんくらぶが案内しないから調査できないともいいます。わずか五、〇〇〇㎡の林の中の岩穴を、自力で一つ一つ見て歩くことができないというなら、どうしてナキウサギ調査をしたなどといえるのでしょう。本当に不思議です。

機構と林野庁が直ちに現地調査しなかった責任は大きいと考えます。

八　ふぁんくらぶへの謝罪要求

―一一月七日―

不可思議の最たるものは、緑資源機構の理事長からのふぁんくらぶへの「厳重抗議書」でした。公式の場での謝罪と抗議文撤回を求めてきたのです。それも配達証明付郵便で。NGOが突然、準国家機関からの謝罪要求などを受け取ったら、普通は裁判を起こされたのと同じくらいショックを受ける、そうした効果を見越しての行為です。

正直言って、私自身もとても驚きましたが、気持ちを落ち着けてよく読んでみました。

「内部監査を行なったところ、関係職員は全員、『穴を埋めていない』と答えた。だから、職員はやっていない。それなのに、ナキウサギふぁんくらぶは、職員が関与したか、事実を確認もせずあたかも機構のしわざのごとくマスメディアに公表し、機構と職員の名誉、信用を害した。だから謝罪せよ。」

同封されていた内部監査報告書を読むと、監査といっても職員に対する「黒土で埋めたか？」「フッキソウを土に差し込んだか？」などという聴取だけなのです。「やっていないと答えているから、やっていない」という論理は、市民を納得させる論理ではありません。また「関与」とは自ら穴埋めした場合には限らないのですから、情報管理や入林状況の調査などが必要で、職員に聞き取りするだけでは調査としてはまったく不十分です。

そもそも、理由をあげて疑惑を指摘し真相解明を求めただけでなぜ謝罪する必要があるのか、理解できません。ふぁんくらぶの若い女性スタッフが、「これでは民主主義国家とはいえませんね」とつぶやきました。

九　紋次郎さんも怒る！

その後私たちが機構に抗議し逆に謝罪要求の撤回を求めたのはもちろんです。

一一月一八日には、日本環境法律家連盟が以下のような抗議文（要旨）を出しました。

「そもそも「機構」は公の団体であるから市民は自由に批判ができ、そのことによって「名誉」「信用」が害されるという問題は生じない。機構は誠実に調査をして市民の疑念に応える義務を有する。

杜撰な調査によってふぁんくらぶに謝罪と意見書の撤回を求めた機構の行為は、自然保護運動に対する不当な圧力行為であって許されるものではないし、さらには憲法二一条によって保障された国民の結社の自由、表現の自由にも抵触するものとも評価しうる。よって、貴機構に対し厳重に抗議するものである。」

また、大規模林道に反対する全国ネットワークから紹介を受けた、木枯紋次郎さんこと参議院議員の中村敦夫さん（緑の会議）は、全国各地の大規模林道の実態を見ている方で、昨年三月の農林水産委員会でも大規模林道事業の見直しについて質問していますが、林野庁に対して、機構のふぁんくらぶへの謝罪要求を撤回するよう申し入れをしていただきました（一一月一九日）。

さらに、北海道内の四つの自然保護団体（北海道自然保護協会、北海道自然保護連合、大雪と石狩の自然を守る会、十勝自然保護協会）も結束して、林野庁へ以下のように抗議しました。

「「ナキウサギふぁんくらぶ」が客観的な状況証拠に基づいて指摘した人為的穴埋め問題に対し、公的機関ともいえる緑資源機構が良識では考えられない稚拙な内部調査を実施し、それに基づいて同ふぁんくらぶを指弾した点は到底許されることではない。このような行為は公害・環境問題で過去に不幸な歴史を負った反省に立って、行政と市民が新たなパートナーシップを築こうとしている状況に逆行するものであり、何よりも行政に対する市民の信頼を裏切る行為である。

林野庁は、緑資源機構に対し不当な同ふぁんくらぶに対する抗議と謝罪を撤回させるとともに、希少野生生物の生息地を破壊する悪質な行為として徹底した真相の解明をすべきである。」（「大規模林道『平取・えりも線』二区間の事業継続決定に関する抗議および要請」一二月二六日付）

一〇　市川利美の狂言！？

機構がふぁんくらぶに対して前近代的な脅しをかけてきたその直後、極めて近代的な攻撃、ふぁんくらぶのホームページの「掲示板」を利用した攻撃がしかけられてきました。主役の「小市民」氏は、一一月二七日、こう切り出しました。

「環境保全に興味のある一市民です。大規模林道というキーワードを追っているうちに、このサイト・にたどり着きました。そして、『生息地破壊への抗議文』を見て愕然としました。林野庁や緑資源公団の暴挙に？　いいえ、抗議文の内容に対してです。『敵対するお前たち以外に、犯人がいるはずがない』という論調のみで、なぜ、ここまで断定的に他人を犯罪者扱いできるのか？こんな論法で、本当に抗議行動を起こしているのか？この人たちは、他人のプライドとか名誉とか考えているのだろうか？　敢えてひねた見方をすれば、このような主張をする人も、緑資源公団と同等に怪しいのですよ。『場所を知っている』という客観的な判断材料は、市川代表も緑資源公団と同等の容疑者の一人であることを示してるにすぎません。『緑資源公団をやっつけることに固執するあまり、既に放棄されている巣穴を埋めて、あたかも大事件が起きたように振る舞っているのではないか？』という空恐ろしい考えさえ小生の頭には浮かんだのが正直なところです。（中略）市川代表やこのサイトに集まる皆さんの意見を聞きたいなあ。ただし、『詳しいことは何も知らないで』『このHPから出て行け（HPを開設する以上、オープンですよね）』『緑資源公団の回し者だ』といった感情的な反論は、歓迎しません。」

匿名をいいことに、もっともらしく、しかしたいへん卑劣な言い方です。

以下のように掲示板で反論しました。まずふぁんくらぶの「抗議文」が機構を犯人と断定してはいないことは明らかであることを指摘した上で、「市川利美の『狂言』の可能性もあるということでしたら、もちろんその根拠も示した上でですがそうした視点で、調べていただいてもかまわないのです。しかしながら、緑資源機構が行なったのは、一部の職員に対して『埋めましたか』『埋めません』という聞き取り程度のことしか行っておりません。私たちに問い合わせもありませんでした。（中略）

そもそも、自然保護団体が、希少動物の生息地（情報）を具体的に建設主体に渡すということは、普通はしないことです。今回はその幹部にとても熱

心に頼まれたということもありますが、ナキウサギ保護のために使ってもらえると信じたからこそポイントを示した地図を渡したのです。相手が憎い、つぶそうと考えていたらそうした貴重な情報は断固として渡さなかったことでしょう。公の場で「アセスはずさんである」として公表する方が、緑資源機構には手痛いことだったでしょうから。」

その後のやりとりでも、小市民氏は私たちの回答には直接反論しない、しかし、市川（ふぁんくらぶ）が独善的であるという言葉だけはしつこく繰り返しました。

しかし私たちとしては誠実に回答することを心がけましたし、何人ものナキウサギふぁんが理路整然と（ときには北海道弁を使って和やかに）書き込みを続けた結果、小市民氏の正体が少しずつ燻し出され露わになっていきました。こうして、さすがの論客、小市民氏とその分身三、四人も退却せざるを得なくなりおよそ一〇日間にわたる掲示板闘争は幕を閉じたのです。

このような形のNGOつぶしは、まずNGOを挑発して感情的にさせる、不毛の議論にNGOのメンバーは疲れてしまうし、NGOが暗いイメージになり会員が離れていってしまうということを狙った、極めて狡猾な手口なのです。こうしてつぶされたNGOも実際にいくつもあるようです。

幸いナキウサギと自然を愛する人たちの力でこの事態を乗り切りましたが、緑資源や林野庁に真相解明と建設中止を迫っている最中にこうした攻撃があったことは興味深いことです。

一一　浮かびあがってきた問題点

「人為的穴埋め」問題も含めて、大規模林道には根本的な問題が多いことがより鮮明になってきています。

たとえば、大規模林道が林業振興に具体的にどう役立つのかは不明であるし、平成13年度版アセスがずさんであることに加え、昨年度の機構のナキウサギ調査も、報告書を出すたびにポイントがずれている上、自身が測定したGPSデータ結果からさえずれているなど調査結果は全く信頼できないものです。

さらに昨年日高地方を襲った台風一〇号は、大規模林道「平取・新冠区間」の道路を七六ヶ所も崩壊させました。上下ののり面の崩壊の結果、路面が埋まったり陥没した場所が崩壊箇所全体の六割を占めていて、それらは大規模林道自体が招いた被害と考えられます。

大規模林道は災害時の代替道路として役に立つとされてきましたが、逆に新たな災害を生み出し災害を増大する危険性が高いのです。

まだまだありますが、すべてを列挙し尽くすことはできません。

時代錯誤的に生き延びようとしているこの大規模「自然破壊」道路建設事業から、今ナキウサギや野生動植物、生態系全体を守らなければ、北海道の自然はやがてずたずたになってしまうでしょう。一月一七日、北海道の自然保護団体が共同して、『大規模林道問題・北海道ネットワーク』（代表・寺島一男さん、事務局長・江部靖雄さん）を発足させました。参加したのは、道自然保護連合、道自然保護協会、十勝自然保護協会、大雪と石狩の自然を守る会、ナキウサギふぁんくらぶの五団体です。

この五団体は、これまでも自然保護のために共同で調査や申し入れ活動を行なってきましたが、今後は大規模林道についての情報交換を進める中でよりパワフルな活動を行なっていけると思います。無数のナキウサギ生息地が大規模林道の犠牲にならないように今後も頑張っていきますので、どうか、ご支援くださいますようよろしくお願いいたします。

又、ナキウサギの生息地がこれ以上、開発行為によって破壊されたり分断されたりすることがないよう、ナキウサギの国の天然記念物への指定をめざす署名活動を行なっています。どうか御協力下さいますようお願い致します。（署名用紙は、281－3348までお電話いただければ、送らせていただきます。）

参考文献

「大規模林道はいらない」大規模林道問題全国ネットワーク編（緑風出版）